

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒065-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内

TEL 011-210-5802 FAX011-210-5826

道内の実践校は35校

本年度 都道府県別で最多

本年度のNIE実践校(第1次)が決まった。全国の実践校総数は40都道府県283校(小学校95校、中学校110校、高校69校、その他9校)、うち北海道は24校(小学校5校、中学校11校、高校7校、中高一貫校1校)。道内ではさらに第2次で6校を推薦する。このほか北海道NIE推進協議会の独自認定校5校を加えて実質実践校数は35校と都道府県別で最多となる見通しだ。

NIE実践校に一定期間、新聞各紙を無償提供する日本新聞教育文化財団の「NIE推進事業」は、今年で9年目。実践校には授業や特別活動などで新聞を自由に活用し

てもらうため、その地域で購読できる一般日刊紙(道内は6、7紙)の購読料を報道機関7、財団3の割合で負担し全額補助している。当面は全国の小中高校

総数の1%に当たる400校を目標に認定を進めており、03年度の実践校は389校にのぼった。このほか北海道など7道府県での独自認定制度により実質的な実践校は計

412校となり、目標を超えた。道内では02年度に札幌でNIE全国大会が開かれたことなどをきっかけに、NIEへの関心度が高まり、今年は実践校を希望する学校がこれまでに多く多かった。また、03年度に実践校指定が終了した学校から「3年目も継続実践したい」という希望が相次いだため、このうち5校について独自認定を決めた。04年度の実践校は次の通り。

◇第1次認定校 札幌・日新小、同・山の手南小、同・百合が原小、同・あいの里東中、同・平岸中、同・篠舞中、鹿追・鹿追中、留萌・港南中、函館・函館白百合学園中、函館・旭丘高、旭

川・旭川実業高、虻田・虻田高、標茶・標茶高(以上新規校)、豊頃・茂岩小、函館・北星小、札幌・寒中、同・月寒中、札幌・問寒別中、登別・緑陽中、白糠・白糠中、岩見沢・清園中、帯広・帯広柏陽高、室蘭・室蘭清水丘高、常呂・常呂高(以上2年目継続校)

◇第2次推薦校 浦河・東部小、札幌・道教育大付属札幌中、帯広・帯広第5中、江別・立命館慶祥中高、共和・共和高、根室・根室高(以上いずれも新規校)

◇北海道NIE推進協議会認定校 旭川・東陽中、樺法華・樺法華中、札幌・札幌東商業高、石狩・石狩南高、釧路・釧路工業高(以上いずれも3年目継続校)

生きることの大切さ

機会があつて中学3年生の道徳の授業を参観した。週1回の道徳の授業は教科書がないため、教師が新聞・テレビ・読物などを適宜使い、授業で目頭が熱くなる。心にしみ入った。▼主題は「生きる」とは。三浦綾子さんの「生」との闘いをモデルにした作品だ。テレビで映され、これを素材に教師が読み物資料としてテキストを創った。「安楽死を認めるか否か」で社会問題になった内容である。▼先生は思いを込めて資料を読み上げた。末期妻と死を直視する夫との会話、妻の治療に専念する医者。「延命だけなら死なせてほしい」と嘆願する夫に医者は「できない」と断言する。▼授業の中心課題に迫り、生徒の意見を聞く。「夫はなぜ、医者ではなく、生を考えたか」。生徒は感きわまつたのか、積極的な発言はない。それでも指名された生徒は率直に今の考えを述べていた。▼授業の終末に先生は、日記の一部を読み上げた。先生は、先月亡くなった先生の母親の闘病生活を記したものだった。朗読しながら、先生は何回か声がかわり涙ぐんだ。授業は終わったが、生徒たちは涙ぐんでいた。文芸作品のテキストもよかったが、感動を呼んだのはやっぱり、先生の体験だった。(高)



活動の最終的着地点は

北海道NIE推進協議会会長

山田 家正

5月29日の総会で北海道NIE推進協議会の会長を仰せつかりました。今後、みなさまには何かとお世話になります。よろしくお願いします。NIEに関する活動は、昨年11月28日に札幌市中西岡北中学校で開催された第8回北海道NIE研究大会兼第13回北海道新聞教育研究大会でお話する機会を与えられましたが、まだ知識不足、認識不足の状態です。

たしたいと思っております。小林先生はご専門からいらつてもこの協議会の会長として最適任でありましたが、私は生物学(薬類学)の専攻で教育学の

授業に活用すること、子供たちが社会の動きを知り、学習意欲を高め、積極的な学習態度を身に付ける、という重要な意義はある程度理解してい

思っております。前述の総会の時にもお話をさせて頂いたことですが、私自身が現在まだ整理できていないことがあります。それらは、①北

海道NIE推進協議会として考えるべきことは何か、②各新聞社が考えるべきことは何か、③各教育機関が考えるべきことは何か、④連携して行うべきことは何か、の4点です。

これらは北海道のNIE活動の将来展望を考える上で必要な事項と思っております。つまり、この活動が何を指すのか、最終的な着地点を定めたいという点です。

全国で「新聞活用教室」展開

毎日新聞 道内でも開催予定

毎日新聞社は、菊池寛賞を受賞した「教育の森」をはじめとして、教育問題には特に力を注いでおり、「教育の毎日」を標榜している。NIE活動にも積極的に取り組み、その柱として、東京本社を中心に「新聞活用実践教室」を開催している。

新聞を教材に使ってみたい、もっと有効に新聞を授業で活用できないか、と考えている先生をはじめ、一般の方や学生も参加している。先生たちのNIE活動報告のほか、新聞記者の取材現場からの報告が「売り物」の一つとなっている。取材現場での苦労話、取材から原稿執筆、記事掲載まで一線記者、デスクが報告する。新聞を活用した実践演習の場となっている。講師の先生との意見

交換もでき、現場の悩みの相談もできる。参加費は無料。4月からスタートして、ほぼ月1回のペースで年間10回を予定している。NIE概論、国際面、政治面、経済面、運動面、社会面、学芸面、報道写真、家庭面、科学面、新聞広告と多岐にわたっている。6月までにすでに3回開

催したが、活発な意見交換もあり、好評を博している。1回目の会場には、東京をはじめ神奈川、埼玉、山梨、静岡など各地から約100人が参加した。外信部の記者が「国際



6月も実践教室を開催＝東京・毎日新聞本社で

山田家正会長を選任

道NIE推進協 実践校29校に認定書

北海道NIE推進協議会の04度総会が5月29日、北海道新聞本社（札幌）で開かれ、本年度のNIE実践認定校（第1次）と同協議会認定校の計29校に認定書が手渡された。また、同協議会発足時から8年間、会長を務めてきた小林甫・北大名誉教授が退任し、後任の新会長に山田家正・北海道開拓記念館館長（小樽商大名誉教授）が就任した。

実践校の代表、道教委、札幌市教委、報道関係者ら80人が出席。実践認定校を代表して、札幌・百合が原小の菅原隆司教諭が「新聞を具体的にどう活用していくか、仲間の先生たちとともに実践の工夫を重ねたい」と抱負を語った。また、日本新聞教育文化財団が本年度創設した「NIEアドバイザー」（道内からは5人）を代表し、毛利慎晴・士別商業高教諭が「あらゆる機会をとらえ、NIE普及、発展のためお手

伝いしていきたい」と述べた。総会後の実践報告・懇

談会では山田新会長が講演し、同協議会の今後の役割などについて「新聞教材に関する開発・研究、生涯学習型NIEへの道、北海道型NIEプランの検討など、より具体的なステップを踏むべき段階にきている」と強調した。



実践報告では、宮重徹三・室蘭市立東中教諭が新聞記事からさまざまな感動を見つめる「心に触れるNIE

「今」を読み解く力を

函館でセミナー

「第3回NIEセミナー函館」（北海道NIE推進協議会主催）が6月5日、北海道新聞函館支社で開かれた。NIEセミナーは毎年、道内を巡回開催しており、函館開催は今年の皮切り。小中高校の教諭ら約30人が参加した。

の取り組みについて報告。高瀬敏樹・札幌市立旭丘高教諭は高校の新教科「情報」に関し「新聞の出番がまだまだ少ない」などの課題を指摘した。

4人の先生が実践発表し、まず函館白百合学園中学高校の三崎慈子、渡辺直樹両教諭が「北海道から日本と世界を展望する」と題した卒業論文づくりでの新聞活用実践について報告。渡辺教諭は「生徒たちに、『今』を読み解く力をつけさせたい」と述べた。函館水産高の山本おかり教諭は2年生の「国語表現」の授業で、生徒一人ひとりが好きなテーマで新聞を作る活動を行ったことを紹介。「それぞれに自分と向き合い、完璧とはいえないかもしれないが、味のある新聞を作ってくれた」と成果を語った。函館市立北星小の深澤

＜原稿を募集します＞

学校現場からの投稿を歓迎します。NIE関連のほか学校経営や児童生徒の指導、父母、地域の話題などについて400字前後にまとめてください。学校名を含め原則実名としませんが、希望により匿名も可。ただし原稿にはお名前と年齢、住所、電話番号を明記してください。採用分には2千円の図書カードを贈ります。宛先は〒065-0871 札幌市中央区大通西3-6北海道新聞社内、北海道NIE推進協議会事務局（電話011-210-5802、FAX011-210-5826）。フロッピー処理して送りください。

昌明教諭は、歯の衛生週間や読書週間など掲載が予想できる記事を考えて、あらかじめ年間指導計画に組み入れる実践活動について報告し、「毎年継続して活動できるように、新聞教材を指導計画に位置づけていくことが重要」と強調した。実践発表に先立ち、道立大沼学園の宮地勉彦園長が「家庭教育の重要性」というテーマで講演し、「子育てを社会で共有していかなければならない時代だ。だから学校や先生たちの役割の比重も高まっている」と述べた。

札幌・山の手南小学校

特集、記事めぐり “^{こと}言バトル”

実践校
ルポ



朝倉先生と「朝の会スペシャル」で活発に議論

今年、N―E実践校になった札幌市立山の手南小（野口勝明校長、児童数537人）。朝倉一民教諭が受け持つ6年2組では、子どもたちの興味を引いた新聞記事を朝の会に持ち寄って自分の意見を発表し、その記事について級友たちの意見も知ろうという学習を続けている。今回は、6月21日の道徳の時間に行われた同クラスの「朝の会スペシャル」を紹介したい。（北海道新聞N―Eスタッフ・江本 麻貴）

「ベンリ社会」を疑う

教室内は、テレビ番組「踊るさんま御殿」のよ聞の特集「IT奔流・ベ

「3つも気になる記事があつて」と3枚の用紙を手に笑顔を見せる子……。子どもたちはさまざまな表情を見せていた。

司会の朝倉教諭が①相手にわかりやすく伝える②自分の考えを持つとうと注意する。そして「言（こと）バトル」が始まっ

NIEの実践に参加するようになってからここ数年、毎朝、新聞記事を子供たちに持ち寄らせ、ちょっとした世間話をしている。毎日の記事紹介は子供たちも楽しみにしている時間だ。新学期はじめの頃の子供たちは、高学年といえども新聞記事には慣れていない。したがって新聞記事といっても「スポーツの結

ンリ社会の行方」の記事を、数人の子が持ち寄っていた。ペットにマイク、ロチップを埋め込み、ペットが迷子になっても飼い主がすぐに割り出せるという話が紹介され、簡単に犬猫を捨てたりしないなどのマナーアップ効果が期待される、という。

にも人氣が集まった。この新型携帯電話には「フェリカ」と呼ばれる非接触型ＩＣカードが内臓され、クレジットカードがついている。携帯電話がお金やカードの代わりに使えるのが特徴だ。

しかし、より便利な生活を求めて進化するＩＴ技術に子供たちはむしろ懐疑的だ。「機械にばかり頼る生活は人間をだめ

にする」「お金を貯める喜びがなくなる」「人間も管理されるようで怖い」といった意見が多く出された。

授業も終盤にさしかかり、話題は前の週に菅井かなさんが発表した「保護者が子供たちに見せたくない番組・水10」(6月16日北海道新聞掲載)の記事に移った。クラス

の9割の児童が「面白い」

と見ている番組だが、なぜ保護者が見せたくないかを話し合った。

「下品」「教育に悪い」「現実とテレビと切り替えが出来ない」という声が上がった。また保護者が見せたい番組「サザエさん」「ザ・鉄腕ダックス」「世界ふしぎ発見」についても意見が交わされた。

朝倉教諭はみんなに

となる。わかりやすいデータやグラフ、また関連記事をみつけ自分の学習に生かしていくことが小学生でもできるようにする。

このように新聞は子供たちにとって毎日発行される教科書であると思う

いなどの理由もあるけれど、現実と空想の世界のけじめをつけないとだめ。面白くても一部のお笑い番組のように、人をコケにして笑うことは絶対に生活に持ち込んではいけない」と話した。

「毎日更新」の教科書

山の手南小教諭

朝倉一民

しかし、この活動を毎日続け、「へえ、面白いですだね」と仲間から評価されていくことで、子供たちは新聞をくまなく眺め、様々な記事を見つけるよう

昨日の新聞の価値は半分以上ではないだろうか？つまり、このたった一日の新鮮さが新聞の最大の売りである。したがってできるだけ毎日、新聞に触れることが重要である。小細工はいらない。この毎日の積み上げが新聞に対する関心を広げていくのである。

さて、小学校の授業の中で新聞をどのように教材化するか？単刀直入にいうと、「国語」「社会科」

である。また、声を出して読むことも内容を理解することにつながっていく。

しかも、毎日内容が違いうから楽しさも生まれる。また、道徳の学習では、その記事の内容を自分自身の生活や考え方に照らし合わせ、自分にとっての価値を慎重に導いてくれることも新聞記事の大きな効果である。さらに、新聞はその「正確さ」から貴重な調べ学習の資料

れが、目立つ
昨今、新聞
の正しい日
本語に慣れ
親しむこと
には大きな
力になるは
ず

北海道NIE推進協議会 役員（2004年6月現在）（敬称略）

顧問	會長	馬松山	秋英家	北海道教育委員會教育長 札幌市教育委員會教育長 北海道開拓記念館館長
副會長	同	金丸佐々木	浩一壽一	北海道教育委員會生涯學習部學校教育局長 札幌市教育委員會學校教育部長
同	同	日下部	憲一	北海道新聞教育研究会會長 (札幌市立米里中学校校長)
同	同	若山	茂樹	十勝新聞教育研究会會長 (帶広市立南町中学校校長)
同	同	鏡谷	光司	日本新聞教育文化財団N I E副委員長 (北海道新聞取締役社長室長)
幹事	同	田中	英也	朝日新聞北海道支社編集総務兼報道部長
同	同	中村	隆二	時事通信札幌支社長
同	同	山田	茂樹	苦小牧日報札幌支社長
同	同	島田	英重	北海道N I E推進協議會事務局長
監事	同	石崎	悦郎	読売新聞北海道支社報道課長
同	同	露久保	孝一	産経新聞札幌支局長

石狩南高で講演する庄司直希さん



夢を描いて生きよう

難病の庄司さんが講演

石狩南高校で6月25日、19歳の若者が3年生360人全員を対象に講演する。難病と闘いながらプロのイラストレーターを目指す若者の頑張りを描いた北海道新聞の記事を、同校の3年生の1人が読み、その感動を同紙の投稿欄に投稿したのがきっかけで、実現した。同校は本年度NIE実践校。その中心となる田中崇志教諭らが講演の橋渡し

(北海道新聞NIE推進センター委員 阪井 宏)

講演するのは、渡島管内八雲町の国立病院機構八雲病院に長期入院している庄司直希さん。庄司さんは空知管内由仁町出身。幼児期に、筋

力が徐々に衰える脊髄(せきつい)性筋萎縮(いしゅく)症を発病し、5歳で親元を離れて以来、同病院で療養生活を送っている。両足が不自由で車いす生

とが一番の財産になった」という。石狩市・石狩南高では小論文指導を重点とした総合学習の時間で、新聞の投書欄を読ませる時間を継続して設けた。短い文章で、数多くの話題が読み、広く「世論」を知るきっかけになる、と考えたから。共感した投稿文、あるいは投稿内容を反対する意見などを書かせ、それぞれ読み合い、評価し合った。田中崇志教諭は「他の意見を読むことによって、自分とは違う立場、考え方を知り、視野を広げることにつながったようです」と述べている。



個性あふれる NIE授業 03年度版実践報告書できる

「教育に新聞を」2003年度版実践報告書は、北海道NIE推進協議会が毎年、編集しておき、7回刊行。03年度のNIE実践校全32校それぞれの個性あふれるNIE授業の記録が網羅され、今後取り組みを予定している先生方にも大きな刺激になりそうだ。

紹介されているのは、小学校5校、中学校17校、高校10校それぞれの実践記録。このうち十勝管内豊頃町・茂岩小では、5年国語の時間に、「マンガの方法」の資料として新聞の4コママンガを活用した。興味を引いた新聞マンガをA4判のノートに書いてコメントを入れさせた。

「成果を記している。岩見沢市・清園中は、「新聞から歴史や文化を探究し発信する」というテーマを掲げ、まず新聞各紙を読み比べた。

い・悲しい事件」「平和について考える」「冷夏による影響」などさまざまな。清藤真智子教諭は「3学年教師団が一丸となって取り組めたこ

とが、一番の財産になった」という。石狩市・石狩南高では小論文指導を重点とした総合学習の時間で、新聞の投書欄を読ませる時間を継続して設けた。短い文章で、数多くの話題が読み、広く「世論」を知るきっかけになる、と考えたから。共感した投稿文、あるいは投稿内容を反対する意見などを書かせ、それぞれ読み合い、評価し合った。田中崇志教諭は「他の意見を読むことによって、自分とは違う立場、考え方を知り、視野を広げることにつながったようです」と述べている。

10月に道徳教育全国大会

道徳教育研究大会・北海道大会札幌大会(全日本中学校道徳教育研究会など主催)が10月21、22日の両日、札幌市立旭小学校、札幌コンベンションセンターなど4会場で開催される。全国の小、中学校の道徳教育関係者ら約1000人が参加する予定。

幼いころから絵を描くのが好きな庄司さんは、昨年度の二科展・ポストカード部門に出品し、入選。勉強のかたわら、携帯電話会社のホームページのデザインを担当し、医学書の表紙のイラストを描くなど、活動の場を広げている。夢はプロのイラストレーターとなり、札幌で自立して暮らすことだ。そんな庄司さんの頑張りが3月9日付の北海道新聞「まど」欄に紹介された。

これを讀んだ石狩南高2年(当時)の佐藤春菜さんが、庄司さんの前向きな生き方への感動をつづった作文を、同紙の小・中・高校生対象の投稿欄「みらい君の広場」に投稿し、4月18日付で紹介された。庄司さんもこの投稿に励まされ、イラストのプレゼントを描き、「佐藤さんに届けたい」と北海道新聞NIE推進センターを通して同校に打診。田中教諭が「せっかくの機会なので、3年生全員の前で、お話しを」ともかけ、実現した。

編集後記

旭川に行った折、深夜のネオン街の近くで少年らの「オヤジ狩り」が行っていたと聞かされ、暗然とした気持ちになりました。高校生風の一人を含むいくつかのグループがあるといえます。裏通りの暗い駐車場近くに出没し、酔ったオジサンを殴る蹴る、サイフを奪うなど傍若無人そのものとか。バックを奪われそうになり、必死に抵抗したというある女性は「結局、取られてしまったので警察に届けたら、あんた、命とバグのどっちが大事なの。ヘたに抵抗なんてしたら危ないよ、って他人事みたいのなよ」と怒り心頭のようでした。

こうした暴挙を繰り返す少年たちに「いのちの大切さ」を説いたところ、どうもなしくなりました。そうすることはいえ、見過ごすこともできません。家族の崩壊がいわゆる「共育」を地域社会で大事なことと意識すべきではないか、と思わずにはいられません。(S)

北海道新聞「まど」欄に紹介された。これを讀んだ石狩南高2年(当時)の佐藤春菜さんが、庄司さんの前向きな生き方への感動をつづった作文を、同紙の小・中・高校生対象の投稿欄「みらい君の広場」に投稿し、4月18日付で紹介された。庄司さんもこの投稿に励まされ、イラストのプレゼントを描き、「佐藤さんに届けたい」と北海道新聞NIE推進センターを通して同校に打診。田中教諭が「せっかくの機会なので、3年生全員の前で、お話しを」ともかけ、実現した。

参加希望者は大会運営事務局(札幌市立栄中学校、TEL011・721・3237)に申し込み、問い合わせを。参加費は資料代など4500円。